

第一次パラワン島調査隊  
報告書

——ミンダナオ島リャンガ——

1965

横浜市立大学探検部第一次パラワン島調査隊

矢野花子 矢野花子

## 序

200mほど前方、ヤシの茂る中に、白や赤の建物の並ぶタフロンパンの町を前にして荷物を甲板に運んだとき、入国できない旨の電報をうけた。それが結局この調査隊が失敗に終わったという瞬間だった。たしかに準備不足がこのような結果をもたらしたものである。しかし準備の日々は短のおおくなるほどいそがしかった。それでもなおかつ十分ではなかった。

たしかにわれわれは、海外探査を達成するというを第一の目的としていたためにそぎすぎすぎたきらいがあったかもしれない。

一方部員全部が協力してこの計画をすすめたわけではなかった。準備をはじめめたのは2、3人、そして出発近くなってからもほとんど隊員が動きまわっていたというありさまだった。けれどそれが根本的な失敗原因だったとも思われる。

国内では想像もつかないほど現地ではわからないことが多いのである。今回の失敗も一つには準備段階でのミスがあるがもう一つには現地では向か起るかわからないという問題があったと思う。なせなら行く前までは、とても、それが失敗原因になると見えなかったからである。

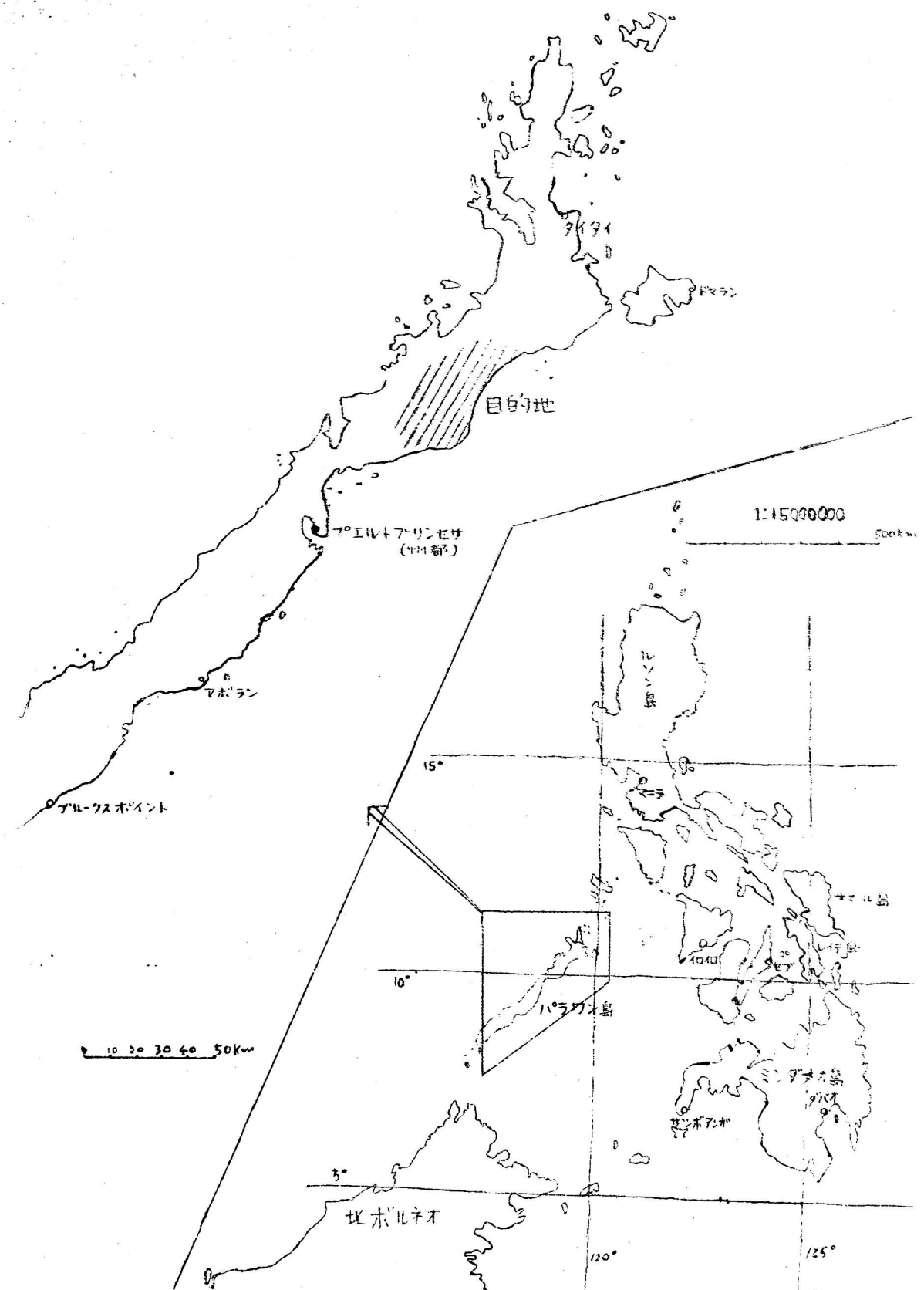
とにかく、われわれは、それでも、ミンタウオ島に上陸することはできた。目的のパラワン島は、その姿をおがむこともできなかったが、とにかく海外へでたことは確かである。そればかりでなく、実際パラワン島へ行った場屋に、どうしても直面しなければならぬ幾つもの困難な桌に遭遇した。それは考え方によっては、海外へ目を向けようとしたわれわれにとって、きびしい注意であり、また希望へのワン・ステップであった。

この報告書は、次に続く者たちのために準備段階の方法や、現地で知った様々の注意、そして、現地で得たいくらかの資料をまとめたものである。

お世話になった多くの方々、玉福神丸の船長、一等航海士をはじめ乗組員諸氏、第一中央汽船の出原氏、福島氏、野村氏、近海課の諸氏、東海運の諸

氏、福神汽船社長の瀬野氏、国際航業の中山氏、アジア経済研究所の諸氏、  
神奈川県立博物館準備会の小林氏、民族学者三吉朋十氏、経済的援助をして  
いただいた県知事、県議会議長、物品援助をしていただいた大日本製薬、三  
共製薬、岩城製薬、渡辺製菓、カバヤ食品、湯浅電池、朝日新聞社横浜支局  
、フィリピン協会、学長はじめ学内の諸先生、生協をはじめとする諸団体、  
ビスリグ税関のナルシソ・ベラルミノ氏に心から感謝します。

1965年12月1日 菅田 弦



マニラ (111 都)

マニラ

ブルースポイント

ボルネオ

# — 目 次 —

パラワン島調査の目的	1
準備日程	2
隊員 成	5
行動日程	6
入国できなかった理由	8
会計報告	10
庶務報告	11
渉外報告	12
装備報告	16
医療報告	22
食料報告	24
ミンダナオ島リアンガでの調査報告	26
リアンガの生物1.(植物)	26
リアンガの生物2.(動物)	28
リアンガの地理	32
リアンガの民俗	36
ピサヤ語について	41

# パラワン島調査の目的

## 1. 生物

ウォーレス線の修正線がパラワン島の北のミンドロ海峡を通過していて、パラワン島の生物は、フィリピン諸島の生物よりホルネオのそれに近いという。鱗翅目、けっ歯目を採集し、その中でも特に、アカエリトリバナエゲハの島内での分布を調べる。

## 2. 民族

島の東海岸ないし内陸にはネグリの一種であるバタク族が居住している。採集・漁撈生活を営むといわれ、アンダマン諸島、ルソ島奥地のネグリと関係があるものと思われる。言語はその周辺に住むタクバヌア族と同じだという説と、固有のものを多く残しているという説とがある。物質文化の採訪、言語の録音を行い、滅びゆく民族の遺産を探る。

## 3. 地理

このバタク族が原始的採集経済を営んでいるということは興味深い。バタク族の経済体制、集落の形態の現状を見、問題点を明らかにする。特に資本の流入状況とそれに伴う経済体制の変化はみのがしてはならないと思う。

## 準備日程

1964年

10月3日

東南アジア原住民の研究からパラワン島に興味を持つ。

11. 10

部内に海外探査準備会発足。

27

フィリピン大使館訪問 渡航についての状況をきく。

30

パラワン島調査準備報告(郵覆へ) No. 1

12. 7

準備計画について決定する。春にゆく予定を立てる。

9

野村鉱業を訪れ、プエルトプリンセサの水銀鉱山のことをきく。  
外務省、通産省を訪れる。

17

日本郵船、APL、MMを訪れ、船便について相談する。海図3  
葉購入する。フィリピン協会訪問。

18

フィリピンエースライン、関西汽船、日正海運を訪れ、船舶の交  
渉をする。

1965

1. 10

各々関係者との渉外を報告し合い今後の見通しを立てる。

13

日本探検協会準備会に参加し、農大ミンダナオ調査隊員に現地の  
状況をきく。

14

趣意書、援助方願いのタイプ印刷完成。

16

部総会において計画を公にする。

19. 27

横浜油漕船の社長と船便について相談する。

2. 19

海上保安庁水路部訪問、水路誌をみる。

23

立教大アジア地域研究所訪問、資料をかりる。

24

日本探検協会準備会で、深田又弥氏などに計画を発表する。

25

国際航業の中山氏訪問、パラワンについての詳しい事情をきく。

3. 1

学長に計画を発表する。

5

福島助教授、太田学部長、進交会訪問。

6

エバーレット訪問

16

文理学部長、事務長、学生課長と話し合う。

- 25 パラワン島調査計画書原案(ガリ刷)なる。
- 29 国際航業中山氏訪門。計画書原案を学生課長に25部出す。
- 30 第一中央汽船の出原氏訪門。船の便についてお願いする。
- 31 鍛冶田商会訪門。副社長よりマースマン社に聞して手配してもらう。
4. 1 第一中央汽船の出原氏より玉福神丸について等、種々の案をさく。
- 2 第一中央汽船の出原氏を通じて福島氏に話をしてもらう。福島氏、尾道の玉福神丸の船主に電話をかけて都合をきいてくれるとのこと。
- 5 三菱商事木材部訪門。川田氏よりパラワンについてさく。第一中央汽船訪門。船の可能性大。
- 7 第一中央汽船の玉福神丸便乗決定す。(4名) 残りの2名のためエバレットの後藤氏にお願いする。
- 8 第一回パラワン会議、メンバー合員をろう。
- 9 県庁訪門。旅券についてさく。 12 役員決定。
- 13 エバレットに船を断わられる。大使館訪門。
- 14 東京農大訪門。国岡氏と話し、Invitation Letterをお願いする。
- 15 国岡氏に会い、Invitation Letterの をもらう。
- 16 ユナイテッド・トラベル・サービスが訪門する。学生生活協議会にかけられる。
- 18 Davaoにインビテーションレターを願う手紙を2通出す。探查会総会。先輩よりアドバイスをうける。
- 19 神奈川博物館設立委員訪門。
- 20 探查会の寺島氏に会い、医療関係のことについて話しをうかがう。
- 21 国岡氏に会い、各種のアドバイスをうける。
- 22 西郷教掩と話す。学長訪門。
- 23 ユナイテッド・トラベル・サービス訪門。
5. 5 計画書完成。 8 第一回パラワン・シンポジウム。
- 11 玉福神丸訪門。船長、一等航海士と会う。



5. 13 西郷教授と話し合う。 14 第2回パラワン・シンポジウム。  
 15 第3回パラワン・シンポジウム。旅券申請。  
 20 中村講師と相談する。 21 小林講師と相談する。地理学研究室との合同調査を考える。第4回パラワン・シンポジウム。  
 25 地理研との合同調査について話し合う。 27 旅券交付。  
 28 フィリピン大使館訪問、ビザについて交渉する。  
 29 第5回パラワン・シンポジウム。
6. 1 アジア経済研究所、フィリピン協会、United Travel Service訪問。  
 4 東京港へ玉福神丸を隊員全員で訪問。都立大社会人類学教室訪問。隊員5人の乗船が決定し、正式に第一次パラワン島調査隊を結成。  
 5 三吉明十氏訪問。 8 学長の紹介状をもらう。  
 9 学内カンパ開始。 10 西郷教授に世話人となってもらう。  
 14 最終的な計画書完成。  
 15 第一中央汽船訪問、乗船の日と土陸地が決まる。  
 16 フィリピン大使館訪問、ビザの交渉。朝日新聞記者来訪。金沢八景駅前でカンパ。  
 17 横浜港南ロータリークラブへ学長と共に行き、パラワン島アエルトプリンセサのロータリークラブと現地での世話を依頼する。  
 18 フィリピン大使館訪問、ビザの手続きをする。横浜駅西口でカンパ。  
 19 物品援助、資金援助のため各所へ渉外。  
 21 物品援助のため、食品会社、薬品会社を訪問。  
 22 物品援助のため、各所へ渉外。ビザがおりる。  
 23 物品援助のため、各所へ渉外。予防注射をうける。ほげましの会。  
 24 物品援助のため、各所へ渉外。  
 25 荷物を運び、玉福神丸に積込む。出国手続きをする。

《注》 渉外は隊員一人で行ったものもあり、5人全員で行ったものもあり、又他の部員がやったものもある。それは当然渉外の種類、期間の問題から違って

くるはずだ。こゝに出てくる諸氏については、14ページ以後の關係者名簿  
を参照されたい。

### 隊員構成

隊長	庶務	菅田	弦	文理学部3年	(民担当)
副隊長	渉外	谷田	濤	商学部2年	( / )
隊員	会計	小林	恵二	文理学部2年	(地理担当)
隊員	装備医療	出羽	寛	文理学部2年	(生物担当)
隊員	食糧	鈴木	光	文理学部2年	( / )

## 行動日程

これは出国の6月26日から入国の7月19日までの行動の概要である。符筆すべき日以外は省いた。

▲6.26 13時、見送りの部員、家族、第一中央汽船の出原、野村氏とともに、乗船する。15時、数人の部員を残して見送りの人達は帰る。17時、のこりの部員も帰り、隊員だけとなる。19時45分、東京港発。21時頃、観音崎沖を通過する。

▲6.27 午前中は伊豆半島の先端、御子元島が沖合に見えたが、それ以来フィリピンの島を見るまで陸地は見えぬ。低気圧の影響で荒れもよう。

▲6.30 北回帰線を越える。天候は安定し、波は小さい。夜には南十字星が見えるようになる。

▲7. 2 下船予定の前日なので、船員たちがコンパをしてくれる。

▲7. 3 朝、スリガオ海峡に入る。11時、タクロバン沖にてパイロットを待つ。14時、パイロットが来て、タクロバン港に入る。第一中央汽船より打電あり。タクロバンで下船できなくなる。16時、タクロバン発。移民官乗船。移民官ブリミス氏と入国に關して相談するが、マニラ移民局でないとダメらしい。

▲7. 4 ミンダナオ東岸を南下。12時、ビスリグ着。移民官は下船し、2人の税関吏乗船する。第一中央汽船よりそのまゝ引き返すよう打電がくる。15時、ビスリグ発。18時、リャンガ湾に入る。夜間、船上で昆虫採集。

▲7. 5 リャンガ湾にて碇泊。午前中、荷主、税関吏と、ミンダナオ北岸のブトリアンまでジープを出してもらって相談。話はまとまるが、後日、荷主側の事情で中止となる。午後、乗船してきたウォッチマンや税関吏からピリヤ語の採集。夜、出原氏より電報があり、今後の方針について討論するが、結論せず。

▲7. 6 8時、小型モーター船で船を離れ、ディアタゴンへ。ウォッチマン1人同行する。8時30分、ジープでディアタゴン発。約20Km、山中のホボ

川流域まで行く。9時、ジープを下り、ホボ川に沿って昆虫採集を行う。1時、道路に沿って採集を続ける。15時、迎えに来たジープでディアタゴンに帰る。16時、ディアタゴンよりカヤックにて船へ帰る。

▲7.7 8時、カヤックにてディアタゴンへ。船長、ベニヤ工場の人とベニヤ工場の見学をし、後、工場のゲストハウスで休息する。10時、船長らと別れ、隊員のみとなる。菅田、谷田、小林は村の見学、出羽、鈴木は昆虫採集を行う。12時から1時間、全員そろって昼食。再び開散。村内見学の際、ディアタゴンカトリックハイスクール訪問。15時、全員落合って帰る。途中、所謂乗合バスに乗り、海岸までゆく。カヤックにて船へ帰る。

▲7.8 9時、カヤックでリャンガへ。税関吏、ウォッチマン各1名同行する。9時25分、リャンガ着。町内で電報を受け取った税関吏は、所用ができたといって帰船し、ウォッチマンと共に行動する。町内より郊外へ。マシ園、部落の1軒を周り、再び町へ戻り、ウォッチマンの家、彼の妹の喫茶店などを訪問。マーケット等を見学後、14時30分、リャンガを出、帰る。

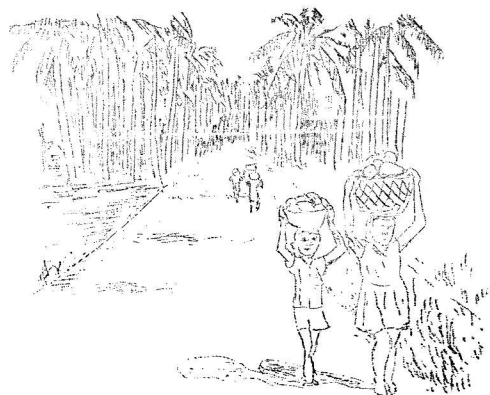
▲7.9 16時、船は揚錨し、リャンガ湾を離れる。

▲7.10 台風10号に遭遇し、全員救命具までつける。

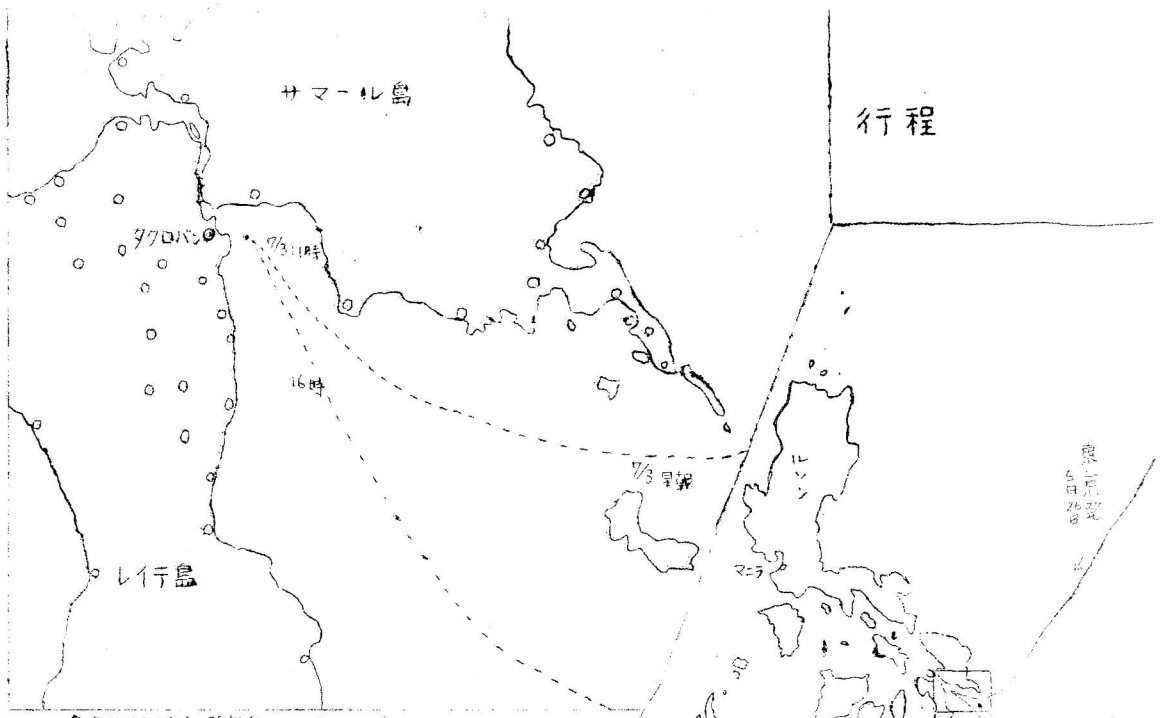
▲7.13 台風から脱出し、道路を東京に向ける。天候は安定する。

▲7.16 北回帰線を越える。

▲7.19 9時、東京港外着。検疫官を待つ。15時、東京港。17時、上陸。

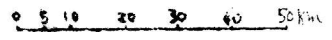
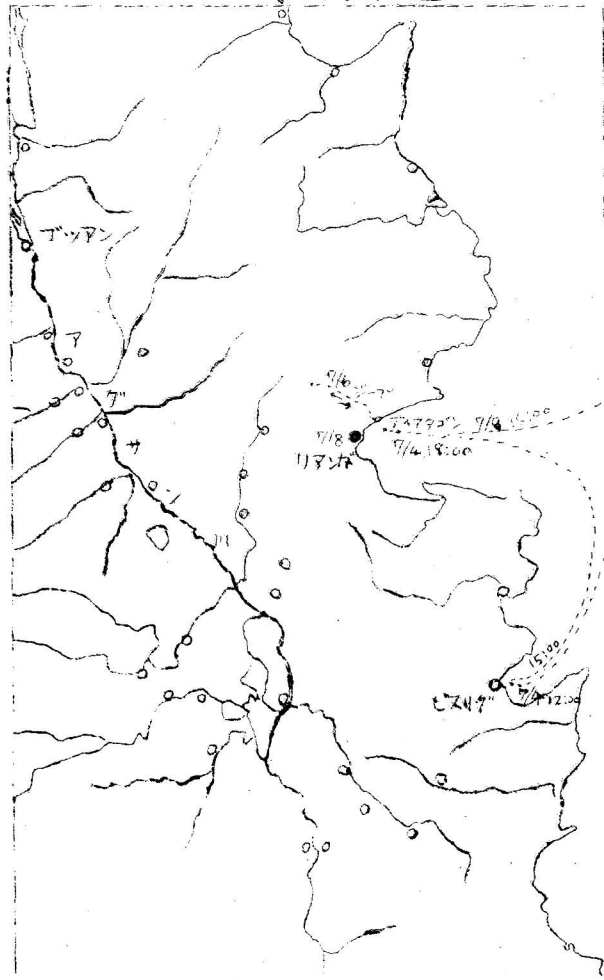


行程



↑タクロバン附近

↓リアンガ附近



## 入国できなかった理由

われわれは旅券も査証も所持していた。しかし、マニラ移民局が許可しないということで入国をゆるさなかった。それは次のような過程で起った。

5月上旬、玉福神丸の船長を通じ、ザンボアンが移民局に問い合わせたところ：ザンボアンがマニラ移民局の許可が入国には必要だという連絡を受ける。

5月下旬、フィリピン大使館にてそのことを聞いたが、インビテーションレターがないと入国できぬという。

6月上旬、第一中央汽船を通じてマニラ移民局に入国許可を下ろすようお願いする。返事来ず。

6月下旬、インビテーションレターなしで、往はタクロバンから入国の条件でフィリピン大使館から14日間のビザ(査証)が下りる。こゝではマニラ移民局のことは一切問題にしていない。また、第一中央汽船の方には再三問い合わせしたが返事がない。そこで殆んど問題ないものとして出発する。その後、マニラ移民局から、我々の際の目的の問い合わせがくる。

7月3日、朝、船にタクロバンでの入国はだめだとの連絡あり。セブなら入国できるというが、セブに船をまわすことは経済的に不可能であった。(タクロバンからセブまで2日かゝり、船は66万円の損害になる)第一中央汽船では、マニラの代理店へお願いしたり、本学を通じてマニラ大学、又、学長を通じてアイルトージンセサのロータリークラブに打電したりして、我々の入国をお願いしてもらうが、遂に許可されず。学長がロータリークラブから我々の招待を受けたが、遂に間に合わなかった。

### 理由の考察

とにかく、今回の入国拒否については、現在その本当の理由がつかぬままとなっている。序にも述べているように、結果としては入国に關する手續の準備不足ということになるが、パスポート、ビザを有しながらなせマニラ

移民局は拒否したのか。パスポートとは身分証明書であり、出国許可証である。ビザとは入国許可証である。

その理由として、種々の人からの意見をいくつかにまとめてみると次のようになる。国内で事前にわからなかったのだが、フィリピンには次のような規則がある。マニラ、セブ、ダバオ、イロイロ、ザンボアンかのちっの比較的大きい港には、移民局があり、その移民局の権限で入国させることが出来るが、その他の港はマニラ移民局が直接管轄しており、マニラ移民局の許可が必需である。これがオースである。しかし、実際ザンボアンが移民局では、マニラ移民局の許可が必需だと言っている。とすると、大きい港でも大体マニラ移民局の許可がいるようだ。ダバオのちっの港ではその移民局の力が大きいのだろう。オースに、日本とフィリピンの間には通商条約が結ばれていない。だから日本人の自由入国はあまり認められていない。オースに、フィリピンは、特に自国のためにならない外国人を入国させない。オースに、入国の目的の名目は観光だった(ビザの関係で)が、観光なら、小さい港からいっつも貨物船から入らないで、規定のコースで入るのが当然だ。どうせ金がないのだからと見られた。(事実そうであった)オースに、まだ対日感情が悪い。特にタクロバンという激戦地では、日本人にとって極めて危険だという。6月下旬に目的の向合せが来ているのはオース、オースと関連している。

大体以上のちっの問題が複雑にからみ合い、タクロバンからの入国拒否となり(現われたものと思われる。もう一つはワイロが非常に横行していたことである。フィリピン大使館がこういった奥について何も注意せずにビザを出したのはなぜか、これから調べてみる必要がある。助言を、現地の状況を知らないまま、フィリピン大使館のヒガだけにまよっていたのが命とりだった。

# 会計報告

## III. 収入

	¥
正理學部後援会	45,000.
商學部後援会	10,000.
進交会	30,000.
内山神奈川県知事	10,000.
篠崎神奈川県議会議長	10,000.
市大職員、諸先生	19,500.
市大生活協同組合	5,000.
市大内、金沢八景駅前、 横浜駅西口、市大各サー } クシよりのカンパ。	8,463.
小計	¥132,963.
文化部連合会	50,000.
探査会	11,900.
部員援助	24,450.
部費	5,000.
小計	¥53,350.
個人負担	358,670.
総計	¥544,833.

## IV. 残額

	¥
進交会返却	30,000.
貯金	101,463.
個人負担返却	221,982.
総計	¥353,445.

## IV. 支出

	¥
装備費	66,150.
区内雑借費	26,000.
海航手続費	12,100.
運輸交際手続料	4,098.
現地滞在費	2,558.
船内食費	35,050.
船内通信費	5,852.
海軍手続費	9,760.
区内、区外電報費	10,190.
テープ	800.
船内係人のホ礼	11,800.
連絡用切手八ガキ	200.
帰国後の送外費	5,385.
写真現像代	2,445.
報告書発行費	1,500.
総計	¥913,880.

## IV. 貯金

貯金は、収入のうち、外部団体、個人援助のものすべてである、¥1,014,630-をしました。

以上、



# 庶務報告

今回への調査隊派遣には非常に多くの予備段階の仕事が庶務によつておこなわれなければならない。パスポートの申請、ビザを得るためのインビテーションレター作成、学長からの紹介状や依頼状の交渉、援助諸団体へのあいさつと報告、更に、船舶関係の書類作成、又、学内においては、語先生や学生の方々の協力の呼びかけやカンパの手続きなど、数えあげればきりがない。今回は、庶務関係の仕事は、隊員全体でおこなつたが、そのために、装備、食料などの仕事が前もつて準備するよう暇がなくなつてしまつた。しかし、全体でおこなつても、充分といふほどの隙があり、パスポートもビザも、相当遅れて交付されたという現状であつた。

計画書についても、隊員や日程に幾度も変更のあつたこともあつて、3月に原案、5月上旬に完成ののち、6月中旬になつて最終的なものが出来たといふ、三重の手向を私つてしまつたといふことはかなり残念である。

準備段階における庶務関係のことについては、反省すべき点が多い。今回から気をつけることとして、まず、英文手紙を積極的に書くことが必要である。できるだけ現地での関係をつき、情勢を知るよう努力しなければならない。次に計画書を早く作成すること。変更はその都度訂正するよう注意がよい。また、パスポートは6ヶ月通用するものであるから早目に申請することがよい。そしてビザの交渉も早目におこなつた方がよい。インビテーションレターや紹介状も同じである。

船内での仕事は、下船のとき税関へ提出する書類の作成、国内との連絡、場合によつては現地との連絡などである。

現地での仕事は、今回は不明確であつたが、実際調査地へいつた場合には国内ではなかつたような堅難な仕事がまちうけていると思う。とにかく、全隊員のうちで、語学力のもつとも要求されるのが庶務係であろう。

おわり。

# 渉外報告

今回は特に初めての海外探査でもあり、種々の準備面で全く未知の経験ばかりかしてあつた。その為、(いろいろ多岐面の渉外が多く、ここに総てを記すとひとく長くなつてしまうので細かいことは準備日程の日記をよんでいただくこととして、海外探査として特に必要な渉外を重点的に記述して) と思う、この経過報告を通じて、第2次隊の準備に少しでも便宜が計れば幸である。

## (1) 渡航関係

我々がこの計画を立てた時、先づ問題になつたのは資金の不足であつた。(考案であるからその金があるわけではない)。その資金不足を補い、一方学生が(1) 立場から他の人の経験できないような事もしてみたいと思ひ、貨物船旅行を企てた。何とか食費俵で行つてやろうというのである。

その後、数社の船会社と交渉してみたが運賃に関する協定によって全くダメであつた。しかしその話を聞いた市大の山田教授によつて、オー中央汽船の出原氏(市大商学部卒 同卒業生)を紹介していただき、氏に全面的にお世話をした。貨物船による客の運送はできないから、我々は乗組員として乗せていただくこととし、乗組員の人員増加の手続きや船員のビザ算、種々の手続きはすべて会社のちにやっていた。

又、フィリピン入国の為のビザには Passenger として切符の

がなければ2週間を発行してくれる。又、Invitation Letter をフィリピン国民からもらひ、それをそえて申請めは59日間までの滞在が許可される。これも麻村のフィリピン大使館へいつてなれぬ 英語で何度も尋ねた後のことであつた。Visaを得るには、Passport と、身分証明書2枚と、銀行の外貨許可証のOriginal 及び Copy、各1枚と、Ticket と、写真2枚が必要で、出帆の際には予防接種の証明が更に必要となる。そのため

3週間前にこれらをやつておく必要がある。又、ビザを申告するとき、学長の推せん状があると一層確定である。

Invitation Letterをもらうのに神奈川県博物館準備の小林氏にも大層御協力願つた。時面的に直に合けなかつたが、計画のずさんさがここにもあらわれており反省する次第である。

船に乗つてからは、現地での上陸や調査等に際しては、船長はじめ乗組員の方々に非常にお世話になつた。

## 〔II〕、學術

我々は学生ではあるがそれぞれのテーマを自分なりにもち、学内、学外の諸先生の貴重な御指導を仰ぐことができました。学内では、地理科の小林、中村先生、生物科の福島先生、学外では立教大学の 氏、都立大文化研究所研究所、アジア経済研究所の梅原氏、東京農大探検部O.B.の国岡氏、三好朋十氏、等、その他多数の方々に資料、方法論の面で御指示をいただきました。又、現地に1年程滞在しておられたことのある国際航業の中山政一氏からは氏の貴重な経験をお聞き、全く状態のわからなかつた我々にとつて非常な助けになりました。

## 〔III〕、資金、援助、諸手續、その他、

先づ我々の活動を認め、物、心、両面から援助して下さいました私倉学長、西郷教授、三輪学生課長を始めとする諸先生、又資金不足に悩む我々に貴重な援助をして下さつた後援会連交会の諸氏、学友諸兄、薬品、食料、研究器具等御援助下さつた諸会社等に、ここで深く感謝の意を表わしたいと思ひます。

# 関係者名簿

## [学術関係]

- 神奈川博物館設立準備委員会 小林峯生氏
- アジア経済研究所
- 東京都立大学社会人類学教室
- 日比協会
- 民族学者 三好朋十氏
- 立教大学アジア地域研究所
- 日比谷図書館
- 自公図書館
- 横浜国立大学図書館
- フォリボン大学
- テキサゴン・カトリック・トキスワール

## [地域関係]

- フォリボン大使館
- 外務省
- オー中央汽船 佐原房一氏 内航部内航課 諸氏
- 福神汽船
- ユナイテッド・トラベルサービス
- APL 代理店
- 通産省
- エバレット・マニラ
- 東海運

- 佐友商事
- 国際建築 中山正一氏
- 横浜港南ロータリークラブ
- パラワン島 プロジェクト・フロンティア・ロータリー・クラブ

[敬尊関係]

- 朝日新聞社
- 神奈川県新聞社

[置用関係]

- 産交会
- 横浜国立大学後援会
- 神奈川県美術会 会長
- 夜叉製菓株式会社
- カバヤ食品株式会社
- 横浜美術会 議長

今回の調査にあたって上記諸氏様おちろん、学内・学外の諸氏に多大の御援助、御指導をいただきました。ここで深く感謝の意を表わすと共に今後存お一層の御批判、御指導と御願ひ致します。

# 装備報告

共同装備、學術装備、個人装備、医療装備、と全船にわたつて、ゴム船にいたるまで、細かく決めた。しかし、結果として、Liangaにおけるこの方向の上陸のみとなつたため、重要な現地生活での体験はほとんど得られなかった。よつて、装備はほとんどそのまま持帰り、男け群島調査隊、北海道隊、に譲つた。しかしここで、わずかながら現地で得た注意点、又最終的にリストが出来上がるまで、パツキング、輸送上得た教訓、等を追つていきたいと思う。

4月5月と、レント、シコラフ、ラジフス、ハンモック等、大きな重要な物について、議論が交されて来た(もちろん最後まで議論は続いたが)。6月に入って、13日頃、バタワ族へのおみやげ(カミソリ、ガラス玉、タバコ、カンヅツ等)が話し合われ、14日にはフィルム、薬品、などの援助を願う会社を決め、16日に初めて、一応のリストを装備係が提出、各会社に当り、14日より、こまごました物を買入れ、24日、ほとんどそろつた。24日夜-25日と荷造り、25日、船につみこんだ。しかし、25日夜にも残りの薬品他を買入れ、25日夜中まで薬品の荷造り、26日の乗船と共に船に運んだというやうな状態で、隊員も、前日まで動悸に動悸回り、睡眠不足で乗船という状態だった。それから、今回は経済的にも相当苦しかった事を記しておこう。

ここで問題となつたのは、次の点である。

ナタを2つにしよう。いや、1つでいいし、三角紙2枚必要だ(本相当の重さになる)。いや、なぜそんなに必要か? もが、セロテープはたくさんあつた方が、色々な時に使える。いや、そんなに必要ない。と。これも拵つていこう。いや、いやな。と、2つの意見に折られた。これは巧一足りなくなる。と困る。巧一必要となるかもしれない、又破損した時の為替、装備の使用上を重視した<sup>意見</sup>と、出来るだけ軽量(出来るなら、5人で運べる位)にしよう

いう、行動上の敏速さを重視した意見であつた。(これは輸送に關係してくるのであるが後に述べる) 荷造りにおいては、リンゴ箱2コと、キスリング5個であつた。最終的には5人でキスリングで運ぼうという事になつたので、船中でリンゴ箱の荷も5個のキスリングに分けた。これも輸送に關係してくるので次で述べる。

輸送に入つて、重量が問題であつた。より大部隊となり、研究上より完備した隊であれば、自分達だけで荷を運ぶというのは無理であろう。(軍船が使える時とか、装備がほとんどいらない時は別であるが)。上にも記したように、5人でザックで運べる程度の装備となつたのであるが、これは今回は予備調査であり、才1回目であり、それほど装備も完備していなかつた事。経済的にも相当苦しかつた事(買入れよりも、運賃)と共に次のようなことによるものであつた。例えば、フィリピンのタクロバンのような小さな港について、飛行機でManila まで行く予定であつたが港から飛行場まで荷物を運ぶのにどうしようかという事だつた。夕暮、へんぴな、宿もあまりなく、言葉もあまり通じない所で、一晩泊らねばならぬかもしれないし、盗難、強盗、などが非常に多いといわれている所で、車などを雇つねばならないとき、軽装であれば、既買はすぐ動けるのである。この行動上の敏速さという点によつてこうなつたのである。しかし、1人35kg前後のキスリングを背負い、各自のスーツケースとなつた。(結局は)

まとめてみると、

1. 車、船、飛行機のつかえる所までの輸送、

(A) 日本→フィリピンまで、

(B) フィリピン国内の輸送、

2. 人力によらなければならぬ所の輸送、

今まで、日本に於いての探査は、リンゴ箱につめて輸送し、キャンプまで運び、そこを中心としてキスリングを使つているわけであるが、海外遠征の

場合、かつてがちがう。一つは、現地でポーターを僱うことがない事と、交通、運賃、言葉等の莫より勝手がぬからないといふ事である。

フィリピンでは、陸路は発達してゐなく、雨期には特にひどく、車のつかえない所が多い。しかし飛行機は相当辺りな所まで行つてゐるし、船の便も相当便利だ。(島内定期船は、週に一度ある。)

それからポーターのことであるが、ポーターというと何か荷物を運ぶ土人とか、ヒマラヤのポーターを思い出し、これが探検につきもののように感じるが、実際にフィリピン人に接して見て感じたことは、確かにテレビや電気製品がないとか、教育の面においてもちがうけれども、他は日本人と少しもちがひない、ということである。だから簡単にポーターを僱えると思つたら大まちがひである。

次に現地でどうであつたかを見てみよう。

この時期、Liangga は乾期であり、スコールも時々あつたが、ラワン材切出し用道路はかたし、立派な道で、森林も日本のそれとよく似ていて(中の方はつる性の植物が茂り、うっせうとしていたが)さほど危険は感じられず、テントを張れる位の所は各所に見られた。しかし、雨期になつた時、ジャングルの奥深く入つた場合に、ヘビ、蚊、等の要注意動物に対しても十分考へねばならないと思ふ。

次に、装備を一つ一つ見ていくと：

共同装備では、使つたのは、食器、輪ゴム、セロテープ位であつたが、問題となつたのは、テントを拵つて行くが、いくまいかの問題であつた。屋根つき、カヤ付きのハンモックが一番安全で、居心地もよさそうである。テントは非常の時、荷物入れ、等を考へ、もつていつた。

個人装備では、使つたのは、捕虫網、三角紙、管ビン、毒リボ、ポリ袋、ホルカリン、エーテル、酢酸、パラジクロールベンゼン、注射器、カメラ、フィルム、テープレコーダー、筭であつた。問題となつたのは三角紙の事であ



つた。五千枚、一ろ枚とまとまると相当な重さになるためである。

個人装備では、シユラフが話題となつたが、普通のシユラフではやはり暑く（て使えない）。クツはキヤラバンシユーズでよいが、地下足袋も軽くてよかつた。使つたのはキスリング、サブザツク、ナツザツク、サンダル（船内）妻巾着、軍手、タバコ、等であつた。タバコは、1人200本まで持出ししてもいいことになつているが、現地では、日本のPeaceを特に高く評価しており、物々交換用として、ちよつとした場合のお礼の品として、十分役に立つ。

以上、装備についてまとめてみた。何れの場合にも同じであるが、装備は軽ければ堅く、そのためには、的確な判断と、創意工夫、が必要であることは言うまでもない。

次に我々の装備リストを掲げる。

[[[. 共同装備.

	数量		
テント（5人用）	1	タワシ	7
ハンモック	4	知バツツ	2
ラジウス	2	クレンザー	3
ハンコウ	3	ナタ	2
ゴツフエロ	1	ポリタン（2ℓ）	8
食器（大）	10	方形燃料（大）	10
〃（小）	5	ビニールシート	3
包丁	2	函鉄	2
フライパン	1	縄引（10 m）	3
シヤモジ	2	シヤベル	
オタマ	2	ローソク	
魚焼網	1	懐中電燈	3
茶こし器	1	大工道具	1

目覚し時計	1	ビニールテープ	5
釣道具	2式	紙テープ	5
輪ゴム		浄水剤(0.5ℓ)	2
マツ子	50	割バシ	50
セロテープ	7		

#### Ⅳ. 学術装備

捕虫網	5	トラリフ(ネズミ用)	100
” 柄	2	解毒用具	2
捕虫柄取付け金具	3	三角紙	5000
三角紙入れ	4	ホリ袋(100×100)	25
毒つぼ	3	” (30×30)	200
毒びん	15	セロテープ	5
管びん(大)	30	紙テープ	10
” (中)	20	新直紙	50
” (小)	15	カスミ網	2
ポリビン(大)	5	ホルマリン(500 <sup>cc</sup> )	2
” (小)		エーテル(500 <sup>cc</sup> )	1
虫ピン	400	硫酸(500 <sup>cc</sup> )	1
アセチレン燈	1	パラジクロールベンゼン	2
同、火口	2	アルコール(500 <sup>cc</sup> )	1
白布(2×4m)	2	カーバイト(1kg)	2
黒紙	1	根掘り	1
ピンセット(大)	1	ラベル	200
” (小)		方眼紙(30枚つ折り)	2
ロープ	3	日付印	1

スタンフ台	1	フィルム(モノクロ)	75
同、補充インク	1	カラーフィルム	5
マジック	25	注射器	2
棒状温度計	4	テープレコーダー(小型)	1
最高最低温度計	1	テープ(15分録音)	15
巻尺	2	電池(単1)	
トリスリングペーパー	20	〃(単2)	
バネバカリ(1kg)	1	吸虫管	1
〃(2kg)	1		
カメラ	4		

Ⅳ. 個人装備.

キスリング	1	ホイリスル	1
サブザック(ナツブザック)	1	洗面用具	1
キャラバンシューズ	1	手紙	適宜
シコラフ	1	マツ子	〃
サンダル	1	個人薬品	〃
雨具	1	裁縫用具	1式
ジヤンパー	1	磁石	1
上着	2	野帳	3~5
下着	2	ボールペン	3~5
ズボン	2	タバコ	適宜
ムギワラ帽子	1	腕時計	1
軍手	3		
クツ下	5		
ゲートル	1		
サングラス	1		

# 医 察 報 告

今回は44種の薬を持って行った。そのうち使ったのは10種である。レノヒンはマラリアに、アイロタイシンとクロマイ軟膏はキズ、アルギン酸は船中でシンマシに、ヘルタスはビタミン剤、健胃錠は船中にて胃の調子悪く10日では足りなかった。ドラマミンソフトは船酔いに、マーキュロは水虫に、エンテロヴィオフォルムは食中毒等の予防に使った。今回ふり返って考えてまず準備段階において、前日まで隊員は走り回り相当疲労していて船に乗って急にガククリ来た。今後十分計画をねらなくてはならない。そして翌日から船酔いにやられた。5人のうち一人だけは無事で、他の一人は時々吐いたが食事は大体普通に食べた。他の2人は時々吐き、食事も食べない事もあった。他の一人は 吐き、食事も満腹に取れなかった。注意してみると、どうやら特に朝顔子が悪い。一晩中ローリングとピッチングにやられるのだ。酔った時の状態は、ベットにゴロゴロして、何もやる気がなく食って寝て寝ては寝ていた。毎日朝7:00 昼12:00 夜4:00の便所に直向がけられているような状態だった。これでは上陸してから行動に精神的に影響する。今後の対策として薬を使うよりも大事な事は、精神的にしっかりして、日課を建て、生活を規則正しくする事と、極力外へ出て、運動する事。徹底的に運動不足であった。上陸した時は、キズ薬ばかり止めに気を使った。海岸の潮は濁り水路の上であり不便だった。しかし乾期だったせいだが、それほどシメシメしたという事はなく、カヤハエもほとんど見かけなかった。一人虫(何か解からない)に食われて少し赤く腫ただけであった。キズでは、山へ入った時、トゲのある草で毛を抜しの腕にカスリキズを簡単に作った。クロマイ軟膏又はアイロタイシン軟膏をぬっておいたが何んともなかった。しかし長リテを着るべきである。それから暑い為ササブツクを背おひキャラパンをはいて走り回ると相当つかれが激しい。例えば約30kgの荷をかつぐと相当な覚悟が必要だ。現在では多くの種類の薬がそろっている。しかしその薬をうまく使うかである。とにかく探検には苦しい事があるのはあ

たりまえである。それに負けぬ強い精神を養っておく事が重要である。

最後に、塩野義製薬、三共株式会社、武田薬品、加藤薬品、岩城製薬、東京田

辺製薬初物の御助下さった方々に深く感謝するいたします。

## リスト

レゾリン	100 tab	ビタフル錠	100 tab
アイロタイシン	100mg×30	ワルソサン錠	4g×10
ペニシリン	50 tab	ヒオフェルミン	50 tab
クロロマセチン	50 tab	トト散	25g×4
クロタオン錠	50 tab	健胃錠	100 tab
シノミン	100 g	スパリンA錠	100 tab×4
エンテログロブリン	100 tab	サロメチール軟膏	2g×30
E-A錠	100 tab×2	ド ترامミンソフト	2×5×6 tab
クロマイ軟膏	キズ用 3g×5 眼科用 3g×5	メリアン錠	10 tab×5
クロマイP軟膏	3g×5	塩化ベンザルグロム ミ液(逆性石けん)	100 ml
ナコルトA軟膏	5g×2	ヨードチンキ	100 ml
アイロタイシン軟膏	3g×	リバノール	50 ml
アルギン酸	100 tab	マーキュロ	35 ml
セテス末	2g×30	エタノール	100 ml
レジタン錠	2 tab×5	アンモニア水	100 ml
ソクラン錠	2 tab×5	ヒマシ油	20 ml
強カチミコテ錠	55 tab	リベラン(液)	50 ml×8
カセ薬(学校用)	15 包	リベランクリーム	15g×17
グレラン散		リベラン(気体)	300 ml×2
ホウサン末		ドライシリカゲル	20g×6
ゼノール	300 g	金銀ホルム散	2
ヘルタス	20 tab×15	他、ホウタイ(4), 脱脂綿(5袋) カセ(2袋), ヒンセト、ハサミ、マス トケ、板、バツク	

# 食料報告

今回の調査は前述の様に現地滞在期間が短かった為に、あまり良い報告は出来ませんが、上陸したる日商だけの経験に基づき、簡単に述べてみようと思う。

先づ、食料の性質について考えてみると、単に出るだけ栄養価の高いものでなければならぬ。現地では気温が高いため、それだけエネルギー消費量も多いからである。次に軽量のものでなければならぬ。酷暑の下で移動、長期滞在のためにはすこしでも軽くないと、計画が狂ったり、しばしば時敏速な行動がとれないためである。次に、おいしいものでなければならぬ。夏になると食欲の減退する事は一般によく言われることであるが、現地におけるわずかの日の間でさえ、我々には味の濃いものよりあつさりしたもの——例えばスジとかカンパン(特にカンパンは好評であった)——がおもしろく感ぜられた。夏の食物を多く用意したらいいと思う。更に、多種のものを持つていかねばならぬ。10日も20日も毎日同じ食物では、誰でもあきてしまう。まして現地のような善さの新米は、特にこういった事が多いのではないかと思う。そして更に、出来るだけ安価なものでなければならぬ。我々の遠征の予算はあまりにも少ないので1円でも安いものを探さねばならぬ。

以上まとめてみると、(1)栄養価に富んだもの、(2)軽量のもの、(3)おいしいもの、(4)多種のもの、(5)安価なもの、の五つになる。これらの諸条件を満足するような食べもの(理想食と名づけておく)を用意することが必要であるがしかし、このような理想食を探することは困難であろう。否、不可能であろう。どの食料にも一長一短がある。従つて我々は出来る限り理想食に近いものを探さねばならぬ。

次に我々の今回持つて行ったものについて考えてみよう。持つて行った品目に

以下はリストを参照していただくとして、主なものについての試べて

（現地地で得られそうなもの）。

・米（値段不明、多量は無理？） ・バナナ（主食の代用として便利だが、味が濃くあきる。多く食べると便秘する） ・果物（容易に手に入ると思うが、味や匂いが我々の舌に合うが疑わしい） ・野菜 ・肉（魚は容易に手に入ると思われるが、その他については不明）

（不必要と思われるもの）。

現世である程度の食物は得られるので、全需要量の $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{2}{3}$ を賅ってゆけばよいと思う。調味料以外はあまりフィリピンの人々は好まない様子だったので、現世交換用のものは他のもの（日用品、カサ、スリッパ等）にした方がよいと思う。

（更に増量した方がよいと思われるもの）。

・米（現地米は味が悪いので各自1升位必要） ・カンヅメ（腐らないので便利だが、臭いのが気味） ・醤油（みやげ用、交換用として便利のため多量程よい） ・カンパソ（かさばるが重量で、保存がきき、味もあつさりしてよい） ・ジュース（消費量大） ・コーヒー、紅茶（出来たらほしい。緑茶よりよい位）

最後に水の問題であるが、これは最も重要なものであり、一番最初に掲げるべき問題であったかもしれない。現地では高温と低湿度のためノドが非常に乾くが、河川や池の水はマラリアなど多くの病原体がいるため一度沸かそうしなければ使えず人々はヤシの水（約1升1日の量にはいつている）を使っていた。もし多くのヤシが得られれば、水の問題は解決できると思う。すこし生ぐさい氷水が……。

以上、

# ミンタナオ島リアンガでの調査報告

## リアンガの生物

私達、生物班は、パラワン島において、鱗形目、蟹歯目を中心に採集を行い我々の目でパラワン島の自然を見てくるのが目的でした。しかしパラワン島へは行けず、ミンタナオ島リアンガに3日間上陸しただけでしたので、昆虫採集のみにとどまり、トラップをしかけるとマモ、く、現地の生物についてほとんど理解出来ませんでした。一つに、これは私の勉強不足によるもので日程が短かった為ばかりではありません。このように薄学でしかも短日の調査でしたので、「現地の生物はこうなっていました」と発表するのは心ぐるしい感じがします。

しかし、3日間でも、上陸して、初めて熱帯のジャングルに接し、色々な物を見る事が出来ました。次期の調査に備えて少しでも現地の様子を知らしておく事は必要であり、又先に行った私達の義務であると思いますので次に発表します。採集目録は別冊で発表します。

### 採集品

総数 500点

蝶 61種 290点、蛾 種 150点、トコボ 9種、ハチ 5種、他カタツムリ、シ、コガネムシ、サシガメ、等少数、ヘビ一匹。

## 1 植物

### (1) 海岸近く

海岸はほとんどサンゴ礁でおおわれ、波うぎわから、マングローブが密生している(但マングローブではなく崖、直接ヤシ林になっている所も多い。砂浜は少ない)をしてそのうしろはヤシが密生している。人家は海岸の一部を切り開いた所にありヤシの木はさういった所に多くあった。また、道端にはオジギ草



が至る所にみられ、こんもり茂ったオシギ草を捕虫網の柄杓でたぐくと、地面す  
で見えた。イネ科の植物が空地を めていた。背をけは50cm~100cm位。キ  
クイモによく似たのも見られた。この形も、花の様子も日本にあるのとよく似  
ていたのからして、現地では自生しているのではないかと思われる。多くの家  
には窓辺に花の鉢植がおいてあって。西欧の文化の影響ではないかと思われる  
が、その花には、日本で見られるものが2~3種入っていた。芝生なども、人  
家の庭には大に植えてあり、強い日射しを避けるのに役果していた。畑に  
はサツマイモ、アズキ等が作られていた。サツマイモは葉がヨリガオの葉のよ  
うに切れこみの深い。日本ではすまこ姿を消しつつある様な品種が作られてい  
た。

## (2) 山の中

人の住んでいる所から一歩ふみ出るとそこにはもう人跡未踏の地が限りなく続  
いていた。私たちが行ったのは、ミナオ島の山中でしかもそこには、ラウ  
ン材積み出し用の立派な道路が完成していた。形勢は日本の山とよく似ていて  
日本の山中にいる様な感じだった。ながく見ると、せいぜい高く違っていた。  
先づ、下草には、日本なら、ササが生えてそこにはかん木等が、多くは松等の  
木があるのであるが、現地では、オシギソウを始めとして、マメ科、イネ科の  
草木がびっしり生えていた。その上、バナナなどが生え、更に、その上に多く  
の喬木が生えていた。所々に、材木山すに残ったラウソウの木が残っていた。  
その高さ30m位、下草の中には、1mの高さのものもあり、又つる草もありで  
また、丈も小さいものは50cm、大きいものは2m近くもあり、果実、もし  
私達が密林を進む様な場面には、相当の困難を覚悟しなければならないと思う。  
Llangatana川に初めて竹を見た。私達が竹を見たのは、至福神丸と陸地を結  
ぶ連絡船の船体に使ったものだけで、近くの山を見渡しても竹らしいも  
のは見当らなかつた。連絡船に使ったものは、日本にあるモウソウアケの  
様に太いものと、直径5cm位の細いものと両方あったが、結い方の竹は節と節

との長さが80cmもあり、びっくりした。野生の竹は、直径5cm位のものであったが、その生え方は、根本の方はかたまり、上にいくに従って広がっていた。ススキの穂の様な状態であった。DiatagonのHobo川の岸でカボチャ、ハゲトウ、トマトの自生が見られた。前の2種は、自生か否か疑問であるが、トマトは、林の中にも、所々で見うけられるところから、あきらかに自生しているものと思われる。尚、実は、貧弱で大きいものでせいせい、直径5cm位であった。

## 2 動物

7月3日 タクロバン到着、陸地より200m位沖に 泊中、トンボ、キチョウ等が飛んで来た。

7月4日 リアーンが浮(約500m位)に 泊中、風がなく、薄日がさしている午前中、キチョウ、トンボ、とコウトウキミダアザガハが2匹、船をおとすれた。夜になって8時頃 から夜間採集を始める。夜になると船のライトは全てドロボまけの為につけておく、このライトに集まって来る蛾を集めた。アセチレン燈は、既に、強烈なライトがあった為、用をなさなかった。この夜は曇雲りでややムットする位の暑さであった。8時から12時少し過ぎまで、総数150点で地味な小蛾が多かった。しかし中には、自分のアケビゴノハによく似たすばらしい色採のや、大型のスズメ蛾も来た。10時から12時頃までが一番多く、12時を過ぎると、急に来なくなった。スズメガは11時前後に多かった。蛾の他にもオケラ、ゴミムシ等が飛んで来た。船尾のライトの附近では、小型のコウモリがジジジー、リリリーという音を発しながら盛んに虫を追い回している、棒の先にヒモを結び、紙の玉をつけてフリ回し、飛伏ついて来る所をアミでつかまえようとガンバってみたが、無理であった。毒は、酢酸とエーテルを等量に混ぜたものを使った。初めは効果があったが、2、3時間たつと動き足さぬばかりでなかったし、大きな蛾にはなかなかきかず、注射器で、アルコールをうって殺した。もっと数の多い時は別の毒を使った方が良さそうだ。

7月6日 初めて上陸、ディアタゴンの山中20kmジープで入り、Hobollという川の附近で採集した。この日も薄曇りで、時々、強い日光が照りつけ、気温は相当高かった。両側がうっそうたるジャングルとなっている山道にさしかかるとキチョウの類やクロタテハモドキ、アサギシロチョウ等が飛び出し、少しするとベニモンサアケボリアゲハみたいなのが道路わきの5m位の木の梢にまとわりつくように飛んでいた。とうとうゴウトウキシタが姿を現わした。地上10m位の高さを、羽はこまかくふるけれども全体としてフワフワとゆっくり飛んでいる。完全な蝶道ではないらしいが、道路上のジャングルにかこまれた川の上とか、ジャングルの中でも開けた所を好み、地上10m位の高さで行ったり来たりしている。おもしろいのは、小さなツバメがたくさん飛んでいたが、そのツバメが時々、ゴウトウキシタの側をすめて飛ぶとゴウトウキシタはそのツバメの後を追いかけるのを5度ほど見た。時々羽を開いたまま木の葉にズラ下がるようにして休んでいる。この休んでいる所と花に来た所を5匹ほど捕まえた。道路は硬く所々に水たまりがありオタマジャクシがたくさんいたし、トンボの幼虫もいた。Hobollのディアタゴン側の岸は日照りが良く(急傾)蝶道になっているらしく、シロオビ、アオスジ、ベニモン等のアゲハやタテハ、シシミ蝶がよく来た。11:00~12:00頃が一番よく活動するらしく、森の量もこの時間に採集していた。一番多いのが、クロタテハモドキで翌持たさないが、どこにでも目に着く。羽はキチョウとアサギシロチョウである。アサギシロチョウは飛ぶのが早く、路にそってヤブを出たり入ったりして飛んでいた。甲虫類は、最初スウィーピンクをやってみたがさっぱり入らない。少し気をつけて、草や木を見ながらあまりはばかさない。カタツムシの一種が、1.5m位の草にムラがっていた位であとコガネムシの類を見た位だった。上方からブレーキの音が聞え、自転車が来たかと思ったがいつまでも自転車は来ない。よく聞くと、セミの鳴き声であった。後で全身緑色のセミを捕まえたが、この鳴き声の主だったかどうかは解からなかった。この日の採集総数は(蝶)110点であった。

7月7日 昨日と同じくティアタゴンに上陸、今日は部落から少し山道へ入って採集する。子供が10人位集まって来て手伝ってくれた。網をふるのはヘタだがさすがに目が早い。すばやく見つけて教えてくれる。他にもボロボロになってヨナクニサンと尾状突起の3つ位と代虫している大きながを持って来てくれた。採集時間も短かく(昨日は 08:00~3:00p.m. 今日11:00~3:00p.) しかも2人だけで採集したが、昨日より採集量は多く120頭であった。1つは天候のせいらしい、昨日より、日光は強く、虫蝶の量も多かったようだ。採集していると、ハチらしきものが“ブン、ブン”と地面すれすれに飛んでいる。捕まえてみると、シロオビスカシアゲハという蝶であった。後に水たまりによく飛んで来たのを8匹捕まえた。黄色い山さな花がさき、まわりの厚い葉の表面が白く、遠くから見ると白い花が咲いているように見える木がたくさんあった。この花には、コウトウキシダ、アオスシ、オビクジャクアゲハ、ベニモンの類のアゲハ、とかツマベニ等の蝶がよく来た。ツマベニは、高く飛び、速い、一ヶ所にじっとしている事はない。他の動物では、12~13cm位の薄黒いトカゲがたくさんいた。ヘビは2匹見ただけで、一匹は、路上に死んでいた。50cm位で赤と黒のマダラのヘビであり他の一匹は真白で太く2m位、昼食を食べた小川に昼食後3時間後に現われたが橋の下にもぐりこみにげられた。しかし通りがかりのアメリカ人がニシキヘビやコゴウがいるから戻をつやると言っているからいる事はあるのだろう。大体においてジャングルは静かである鳥も時々小鳥を見かけたのと大きなワシの様な鳥が上空をゆうゆうと飛んでいた位で、インコ等がギャアギャアきいているといったような事はなかった。一度ジャングルの中でガサガサ音がするので、サルかと思って見たが解からなかった。フィリッピンには大きな哺乳類は、水牛とミンドロ島のティマラウのみであとはイノシシ位、翼目と齧歯目が多いのである。しかし、鳥類は多いはずである。交換用を持って来たサル(カキザルみだった)と水牛と、鼻が長く、長い黒い毛が生えているイノシシみているブタ(はなし飼いを見ただけであった。しかし、人の話や

上陸時間(8:00頃上陸、3時頃帰る)からしても、色々な動物がいっぱいというよりも、人の目の前には姿を現わさず、本当にジャングルに溶けこんだ生活をしてなければ、姿を見る事はむずかしいようだ。グリーンズネイクも一匹も見なかったが、かまれるまでは気がつかないであろう。

7月8日 リアンの町に上陸。快晴、この日は半分町を見、半分は、附所の岡に上る。ここはヤシ林になっていて、昼食には、ヤシの実をのどをうるおした。町の中には、あの黒いブタがうろついており、町はずれのヤシ林の中には水井がつけられている。ヤシ林の中には蝶は少なかった。シロチョウの類、とジャノメの類が少し、アゲハの類が時々飛んでくる位であった。採集量60匹。まこうの機関にアカエリトリバネアゲハの写真を見せて、「いるか?」と聞くと *aba* (正確でない) と答えて、たくさんいると言う。後ホホ川で対岸の橋を大きな金緑色の蝶が飛んだ時、思わずここにもアカエリがいるのかと思った。しかし彼等は、蝶も蛾もアリバンバンばサヤ語と言っていたように写真を見てアカエリトリバネアゲハと判断したとは思えない。又ホホ川で見たのオクジャクアゲハの類のように思う。やはりここにはいないようだ。ネズミの採集は、夕方トラップをかけ翌朝集めて昼前に整理し午後は昆虫採集と決めていた。しかし上陸に際して翌日はどこで上陸出来るかも解からなかった為トラップは持って行かなかった。しかし一つは人にネズミの事を聞く事と7日は日中だけでもトラップをかければはずであった。もっと巧風できたようだ。

とにかく、広大なジャングルの中にボツンとして、何をしたらよいのか解からないような状態だった。以後は、調査方法と目的をより明確にしておく事と、一週間位の準備期間が必要だと思ふ。この期間に現地の地理になれ、色々な目新しいものにならしておく事である。

最後に、神奈川博物館準備事務局の小林峯生さんはじめ、お世話になった方々に深く感謝するしたいです。

# リアンの地理

## 産業状況

### 1. 農業

主食は米で、その他カモテ等の南方特有の根茎植物が炭水化物源である。副食は種類が多く、カボチャ、キウリ、その他のウリ類、ナス、ピーマン、サツマイモ、豆類、山菜などである。動物性タンパク質源としては魚が主で、ウシ、ブタ、ニワトリがいる(ただしウシは水牛、ブタはイノシシに近い)。米は陸稲で、低湿地を切り払って栽培する。しかし彼らの見たのは、チガヤの裏つた原野だった。普通作物を取った後はチガヤがおい繁り、奇習の者は次の場所へ移動するのだが、彼らが定着している理由についてはもっと考えなければならぬ。その前に果物について記す。バナナ、ヤシ、マンゴー、パパイヤ、パイナップル、カンキョウ類など果物は豊富である。そしてこれらは換金作物ともなり、店に出ている。特にヤシは飲用食物として、日よけ、屋根ふき、輸出用(コアラをセアへ出荷して輸出)など利用度が高い。野菜は、ヤシの向に、それも家の近くに、カコイを作って栽培している。その中にヤシの苗木が沢山あったのをみても、ヤシの重要性がうかがえる。食生活は貧弱だが彼らとしてはそれを満足しているようだ。農業形態をみると定着的焼畑農業である。

### 2. 林業

奥地はジャングルであるが、海岸の集落周辺はほとんど二次林である。ラワン材切出し用の道が、ティータゴンでは奥地へ約

30kmものびている。ここで切り出した原木をそのまま日本へ輸出している他、ディアタゴンにアメリカ資本による約7000m<sup>3</sup>のベニヤ工場があり、ここで作られたベニヤ合板をアメリカへ輸出している。伐採には電気ノコギリを使い、大型トラックによって運び出している。なお工場の一般労働者の賃金は1日6ペソ(550円)であった。

### 3. 水産業

もっぱらカヤックというモーターボートやカヌーで魚をとる。冷凍設備のないためか、ごく少量しかとらず、それでも需要にこたえているようであった。魚の種類については、日本と同種のものが多かったためめからなかった。

### 4. 商業

高所得者(ディアタゴンに多い)や専農の他は、ほとんどの家が大小なり店を出している。リアンカは町並みがそろっており、商店も本格的なものだ。(つまり純商業) 商品は、一般農作物から、衣類、飲物、雑貨、加工品などで、日本製のものも多い。ただし、カメラ、トランジスタラジオなどの高級品はない。ディアタゴンには、果物だけを少し並べただけの店が多いが、リアンカには、食料品や雑貨の一切をまかなうマーケットがある。

### 自然景観

いわゆる熱帯モンスーン気候であり、乾季、雨季の区別がはっきりしている。東海岸のリアンカは夏が乾季である。気温は日

中は40℃前後まで上がるが、朝夕は涼しく、乾燥しているためすこしやさい。土地の人は朝夕は寒いとわかってセーターやカーディガンを着る時とである。スクールはこの乾燥中は不規則で、降る日も降らない日もあるが、主に午後、気温の高い、上昇気流の強い日に約5分間、または雨が2、3回くる。地形は日本とさしてかみらないが、植物ががらりと変わるのど、表面的には大分違ってみえる。一般に平野は少なく、高くはなれが500m内外の山地が重なり、集落は海岸の狭い平地に集中している。ところで住民がどの程度自然に対して向きかっているかという真を見ると、それほど見るべきものがなく、自然に服従している感がある。日本と比べ、また温帯と比べ、厳しい自然と民族の違いからはかりくるものとは思われない。国の政策が地方まで及んでいないためか、あるいは逆に、住民の積極性がないためか。

## 結 論

先上のべたように産業はこれといって活発なものはない。強いていえばラワン材の原木、加工品の輸出だろう。しかし、このように、やはりこの地方にも資本主義の波が押しよせていることは確かだ。そして元来の集落の姿が、漸次変ぼうしてきている。ひいては人間そのものも変わってきていると思う。つまりベニヤ工場というアメリカの大資本が入ってきていることにより、自給自足的な冷細な焼畑農業に従事していた昔年労働者は、安い。しかしそれだけ物価が安いから満足な賃金を得る労働者として化している。そして商業中心の消費文化は次第に根をはってゆく。沿岸附近はラワン材輸出にやってくる日本船員あるいは原地労働者を目あてに



商店街が発達してゆく。人々はここに定着するようになり人口も増えてくる。商品流通がますます烈しくなってくる。以前はながた物欲が心要以上に伸びてきて、人間そのものを変えてしまう。畑にチカヤが茂っても移動せず、その地にひきつけられているのも資本の浸入によるものと思われる。我々は日本において極度の資本主義に慣性となっているけれど、こういう新しい地方の姿を見ると、何か自分たちの国を見なおしたような気分になる。

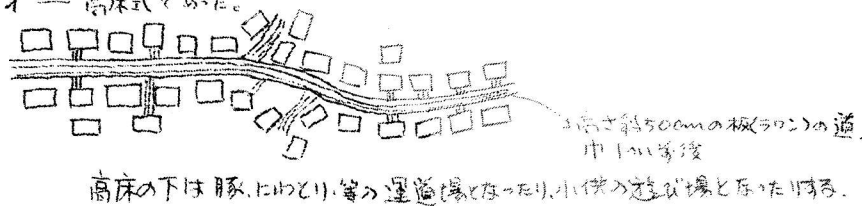
リマンの景観



ティタゴンの景観



バリオ — 高床式であった。



## ミンダナオ島 リアンの民俗

われわれはミンダナオ島東北部スリガオ州リカンカおよびその附近に日向陸しビサヤ族の生活に触れることができた。しかし、本来の目的は、パラワン島の、フィリピン島の民族であるネグリティ族の調査であったため、かなり文化の開けたビサヤ族に関しては、期尚の短かったことと、予備知識の不足などから、単なる概観調査しかできなかった。また、ビサヤ族固有の文化を、他文化と区別して見ることも困難であった。したがって、今回の調査は外国での民俗調査の方法を考える参考になった程度であったと考えるべきであろう。

### ビサヤ族 概略

ビサヤ族は、ルソン島とミンダナオ島の中間のビサヤ諸島に居住していたが、次第にフィリピン各地方へ移っていった。混血が多いためビサヤ語は母国語とするということがその規定である。フィリピンでは最も人口が多くが、支配階級にはあまりでていない。

茶褐色の肌、中背で鼻は低く髪は黒い。マレー族の一種である。ヨーロッパ人の渡来以前に、印度、支那、アラビアなどの文化の影響をうけていた。しかしマゼランをはじめとするスペイン人の渡来により、ヨーロッパ文化が、それらの文化にとって代って支配的となった。

マレー人は、次の3つの波によってフィリピンへ大陸からおしよせたと考えられる。

1. B.C. 200年ころ イフガオ族、ボントック族など北部ルソンの山岳地方
2. A.D. 10~1300 ビサヤ族、タガログ族、パンパコス族など主要なキリスト教徒族
3. A.D. 140, 1500 モロ族

# リアンガにてのビサヤ族有形文化について

## 1. 家屋

海岸の商店街と奥地の部落とでは、家の材料は異なるが、様式は同じである。高床であり、竹で粗末な骨組を作り、これにヤシの葉で編んだ屋根と壁、床はウワン材で、扉はない。窓は押上式、商店はこの窓を大きくとって、その下に張り立しを、商品並べておく。町では壁はヤシの葉のかわりに板になっている。家の内部は、3例しかみていないが、居間に類するところはなく、寝室、食堂いっしょである。室内はきわめて殺風景で天井からランプが下がっている。ベッドは木の枠に竹で組んだもの、木札があって、食卓に使用する。木のイスは簡単なものである。台所は、物入れ、飯台、かまどなどがある。かまどは金杯を2つ、した上にナベなどをのせる。壁には、映画俳優の写真や、キリスト教の写像の絵、それにホセ・リサル（フリピン独立の斗士）の肖像が貼られている。

## 2. 食物

一次産品はわりあい豊富である。

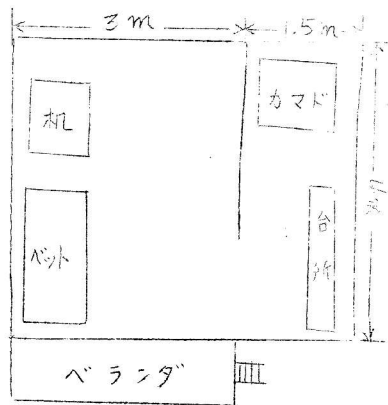
特にヤシ、バナナ、マンゴ、パイナップルなどの菓実は豊富である。野菜も多いが、生産過程での工夫、改良のないためか、トマトなど小石くらいの大きさで、他にカモチという芋、長いわり、カボチャ、ピーマンなど。

魚はすぐ近くの海で取れたものをマーケットで売っている。

しかし、一番残念なのは、彼らの食生活を直接体験していないということであり、詳しいことはわからない。

## 3. 衣類

男女ともに、日本の夏の風俗と大差ない。アロハシャツ、デニムのズボンと、アメリカナイズされている粗末さが目立つが、清潔好きな



リアンガ郊外の代表的な住居  
この家に女主人1人子供5人が住む。  
左側に4m×1.5m程度の物置がある。

のかよく洗濯してある。靴下、帽子などの加工品は不足しているようだ。ズックや編上靴をはいているものもいるが、ハダシが多く、子供のほとんどは何もはいていない。

#### 4. 労働具

彼らは何によつて暮しているのでしょうか。ヤシの木やバナナの木などの育成、商店、そして船の積荷人夫、ベニヤ板工場の賃労働、山間での木材切り出しなどが仕事のほとんどである。したがって山刀、ノコギリなど持参しているものをよく見かける。海では小舟に乗って釣りや、ヤスにより魚を獲る。運搬はカゴなどに入れて頭上運搬がふつうである。

#### 5. 道具

ヤシのかうと竹で作られたスプーンや、太い竹筒で作ったヤシ酒入れなどヤシや竹を材料にした手製の道具がかなり使われている。しかし、日本と同じような、工場製のものも並行して用いられている。

#### 6. 調査にあたっての困難と方法について。

民俗調査に不可欠なことは、原住民と生活を共にすることである。そして文化そのものを一個の体験として感じていかなければならないと思う。今回われわれは、ほとんど調査らしきものができなかった。たのであるが、方法論として感得たことを記してみよう。

家については、その機能と血縁関係という両面から考える必要がある。そして、道具、食物など共同生活の中で調査することが望ましい。また、英語が通じない者が多いため、現地語(ピサヤ語)か、タカロフ語を習得しておくことが望ましい。大抵の困難なら信頼のあける通訳をよとすべきである。

また、同じ民族でも山間、平野部、海岸などでは家屋、生活がいろいろ異なるから注意が必要である。

# リアンカにての無形文化について

## 1. 宗教

キリスト教がすべてであり、カトリックとプロテスタントが共存している。リアンカの町内に巨大なカトリック寺院があり、小さなプロテスタント寺院もある。ディアタゴンも同様である。それゆえカトリック人口の方が多いと思われる。300年のスペイン支配と50年のアメリカの占領とか、このような結果をもたらしたものであるう。

マゼラン以前に信仰していた原始宗教の面影はまったく見あたらない。

ディアタゴンで、交通事故で死んだ子供の墓が道路の真ん中にあり、十字架がたてられ、コココーラが祀られていた。

## 2. 教育

ディアタゴンもリアンカも、小学校およびハイスクールがある。小学校は6年制で、授業は、低学年はビサヤ語とタガログ語、高学年は主に、英語で行うという。職業関係の設備もととのい、小学校を卒業したたけで社会人たりよう配慮してある。

ハイスクールは、すべて英語によって授業を行い、教科書の半数くらいはアメリカの発行である。タガログ語の本は1年用の文法書と、英語との辞書のみであり、ビサヤ語の本は皆無であった。これは、Diatagon Catholic High School の場合であり、ここでは、教師、生徒数は下記のようであり、すべて原本人である。

ハイスクールは小学校を卒業した者が入り  
4年生で、ここを卒業した者は、大学に入る  
ことができる。

生徒	
1年	76名
2年	56
3年	46
4年	41

リアンカには大学はなく、最も近くには  
オツアンにあり、バスで約半日の距離がある。

教師	9
----	---

## 3. 言語

リアンカは、ビサヤ語が使われるが、ビサヤ標準語のセブ方言とはかなり違い、モロ語などの混じる方言であるという。

英語は、若い者と、男の半数くらいは話すことができ、他の者も10才以下の子供以外は簡単な会話ならわかる。しかしその発音には強いなまりがあり、気のつくものには下記のようなものがある。

θ → d (例 that → dæt or dæd)

θ → t ( three → tri:) )

f → p ( fat → pæt)

ə → er ( father → Päter)

z → s ( zoo → su:)

これはスペイン語の影響と思われるが、スペイン語人口より英語人口のほうが多い現在、このようななまりが残存していることはいかなる理由によるものであるか不明である。

なお、タガログ語は多くの人が理解できる様子である。

#### 4. 書籍

新聞は英語のものしか見なかったが、タガログ語のものもあるという。しかし、リアンガは、マニラから輸送と3日ほど有するため日刊新聞よりもむしろ週刊紙を多く読まれている。

週刊紙はリアンガのマーケットで販売していて漫画や絵物語が多い。英語、タガログ語、ヒサヤ語のものが数種あるが、ヒサヤ語のものが最もよく読まれていた。すべてB4版100ページ程度で紙質印刷とくに悪く、一部40セントホである。ただし、リアンガでの売価は50セントホであった。

購入したものは下記のとおり。

◦ LIWAYWAY タガログ語 ◦ BULAKLAK タガログ語

◦ SA WIKANG PILIPINO タガログ語 ◦ B I S A Y A ヒサヤ語

(すべて1965年6月23日～7月4日)

#### 5. ラジオ

テレビはリアンガになく、ラジオもマニラやタバオからの放送をきくため各家から高いアンテナを立てている。原形語と英語の数種の放送がある。

## ビサヤ語について

ビサヤ語は、フィリピンで最も多くの人により話されている言語であるがその社会的地位は、フィリピン標準語である Tagalog 語より低い。ビサヤ語(以下 Bisayan と記す)は 10 あまりの方言があり、リアンカもその一方言が話されている。

Bisayan の採集は、乗船していた 2 人の customs と 4 人の watchmen により、英語、および Tagalog を媒介にして行った。特に customs のひとりである N. C. Belarmino 氏からは、Bisayan 標準語であるセブの方言 Cebuano について教わった。綴りはローマ字による慣例に従いテープレコータによる発音の録音も行った。

単語は、英語、Tagalog を Bisayan に翻訳してもらって、文章も同様の方法を採集した。またリアンカの町にテープレコータをもちこんで、船着場や商店などで住民の会話を録音した。

なお Tagalog については、「日比谷カログ語会話」沖実雄著 昭和 14 年マニラ市アトラス商会発行)に従い、現地人の知識を参考とした。

### 字母

A B C D E G H I K L M N O P (Q) R S T U W Y

F, J, V, Z は使用しない。Tagalog にはない C, Q を S や R の発音に使うことがある。

### 発音

母音は A E I O U であるが、かつては A E U の 3 種類しかなかったといわれ、現在でも E と I の発音の区別は判然としない。例えば Cebu は [sibu] と発音される。

子音では ng の発音が特徴的で特殊な鼻音である。ng は [ŋaŋ] ang は [aŋ] nga は [ŋa] と発音される。

アクセントは強弱ではなく高低ではなく単調である。

### 文法

文法については、国立国会図書館にある Rev. A. von ODJIK; Elementary Grammar of the Bisayan Language; 1951 Convento opon; Cebu に詳しく記されているためここでは省略する。

人体語 および 主要名詞

	BISAYAN	TAGALOG
頭	ulo	ulo
髪	buhok	buhok
前頭	astang	noo
顔	abin	mukha
目	meta	meta
眉毛	kilay	kilay
口	ilong	ilong
口	abil	bibig
口	baagot	balbas
歯	ngapin	ngipin
舌	dila	dala
耳	dalaga	tayaga
小	tutunian	lalamunan
後	leog	iseg
背中	likod	likod
背	bokton	braso
手	siko	siko
手	kamot	kamot
指	todlo	daliri
手	bako	hinlalake
爪	kuko	kuko
胸	dukuan	diodib
腰	balakang	balakang
脚	hita	hita
足	binte	binte
足	paa	paa
外	tikod	sekong
皮	panet	balat
肩	abago	balikat
足の甲	lapapapa	talampakan
人	tao	tao
男	lalake	lalake
女	babae	babae
青年	dre tao	hadrasta
少女	binibini	binibini
子供	bata	bata, sanggol
父	ama, tatay	ama, tatay
母	nanay, ina	ina, nanay
木	anbau	daga
又	ero	aso
牛	baka	baka
山羊	kamoling	kambing



カニ	ereng	pusa
ヤる	among	ungoy
ハエ	langaw	langaw
クモ	lawa	gagamba
ハヒ	sawa	ahas
カ	ilan	lamok
カシ	pulgas	pulgas
カシ	ekok	buntok
カシ	dagat	dagat
カシ	langit	langit
カシ	isla	isla
カシ	isda	isda
カシ	ulan	ulan

代名詞

人称代名詞

一人称单数主格

二 "

三 "

一人称复数主格

二 "

三 "

一人称单数所有格

二 "

三 "

一人称复数所有格

二 "

三 "

一人称单数目的格

二 "

三 "

一人称复数目的格

二 "

三 "

指示代名詞

これ kim  
 それ kana  
 あれ yoon

BISAYAN

Ako, ko

Ikaw, ka

Siya

Kami, mi

Kamo, mo

Sila

Ako, nako, ko

Imo, mo, kamo

Niya, iya

Amo, namo

Inyo, ninyo

Ila, nila

Kanako

Kanimo

Kaniya

Kanato

Kaninyo

Kanila

TAGALOG

Ako

Ikaw, kayo

Siya

Kami, mi

Kamo, mo

Sila

Ako, ko

Inyo, ninyo

Kaniya, kanila,

sa atin

sa inyo, ninyo

sa kanila

sa akin

sa iyo, sa inyo

sa kaniya, kanila

sa amin

sa iyo

sa kanila

ito, nito

iyon, iyan

yoon

数詞

	BISAYAN	TAGALOG
1.	isa	isa
2.	duha	dalawa
3.	tolo	tatlo
4.	upat	apat
5.	lima	lima
6.	unom	anim
7.	pito	pito
8.	walo	walo
9.	syam	syam
10.	napo	sampu
11.	once	once
12.	doce	doce
100.	atos	daan
1000.	libo	libo

疑問詞と例文

	BISAYAN	TAGALOG
どこ	asa	saan
いつ	kanosa	kailan
どれ	hain	alin
なに	unsa	ano
いくつ	pila	ilan
どれ	kinca	sikieea sino
どれ	sikinca	kaniho
どうして	magunsa	papaano
なぜ	unsaaman	bakit
何時	unsa orasa	unsa orasa
何日	unsa patea	ha/ anong patsa

Unsa man kana? これは何ですか。  
 Pila man kana? これはいくつですか。  
 Pila ang imang pano igon? 何才ですか。  
 Asa kapa ingon? どこへ行きますか。  
 Pilay pana igong sa imong ama han?  
 お父さんはおいくつですか。  
 Pila ang imong igiso on lalake og babae?  
 兄弟姉妹は何人おりますか。

動詞

	BISAYAN	TAGALOG
与える	ihutag	ibigay
知らせる	dad-a	dalhin
買う	palit	bilhin
たべる	ca-on	humain
ゆめみる	domgo	managinip
着る	so-ut	bihisam
のむ	enum	uminom
感じる	gibati	damdam
みつける	nakita	hanapin
歩く	lakaw	pumaroon
笑う	catawa	tumawa
愛する	gihigog	ioigin
払う	bayad	bayaran
遊ぶ	dula	maglaro
よむ	busa	bumsa
うたう	canta	magkanta
すめる	bingkod	maupo
書く	sulot	sumulat
欲する	gusto	ibig
あかす	sayuo	magsayaw
説明する	magsaplicar	magsalitwang
入る	pagsolud	punasok
聞く	pagdlongod	dinggin
待つ	paghulat	maghintay
考える	pagnumkuna	isipin
言う	pagingon	sacihin
取る	pagcona	kumuha
〜である	man	mayroon

形容詞

悪い	sayop	masama
よい	maaga	mausay
軽い	suga	magaan
重い	boog-at	mabigat
大きい	daku	malaki
小さい	gomay	malilit
涼しい	tugnao	maginaw
暑い	bugnao	malanug
暑い	lnit	mainit
遠い	logo	malayo
近い	da-ol	malapit

白い	puti	puti
黒い	itom	itim
赤い	pula	pula
緑の	berda	berda
黄色い	dalag	amarilyo
桜色の	cape	kape
強い	losog	matibog

文章、日常会話 (英語と Bisayan)

I have a coconut.	Adunay akong lubi.
I have two coconuts.	Adunay akong duha ca lubi.
I can play tennis.	Make dula ako ng tennis.
I can't swim.	Dili ako maka largoy
I came from Japan	Maadto ako sa Japan.
I will go to Japan.	Maadto ako sa Japan.
Please teach me Bisayan.	Mahe-moba imo ako totla-an sa Bisayan.
We can't speak Bisayan.	Dili kami maka sulti ng Bisayan.
I am tired	Ako ay gikspbg.
I am hungry.	Nagutoon na ako.
I want to drink the water.	Ako ay mo inom ng tubig.
I love you.	Gihigog ma ko ikaw.
I want to catch the butterflies.	Ako ay magadako ng alibanban.
Good morning!	Maaiyong Buntag!
Good afternoon!	Maaiyong hapon!
Good evening!	Maaiyong dawigi!
Excuse me	Pasayloa ako.
Thank you	Salamat.
Not at all.	Gidawat ko ikaw.
I'm sorry.	Subu ako.
How are you	Kumsta i ikaw.
Good by <sup>e</sup> !	Adtna ako!